言語表現前と言語表現以後

――言語研究方法論――

藤原与一

私の志す日本語学

一　日本語の研究は、一個特定の言語の研究ではあるが、同時に、言語学としての普遍性を持ったものである。日本語学は、特定言語学であって、同時に一般的言語学でありうる。

諸言語の相違は、おそらく、海上の波と波との相違のようなものであろう。波また波は、海面下において、しずかに、海水の一般性共通性を示す。諸言語も、その波のように個別的であって、かつ、たがいに言語の一般性を示しあう。ここに、個別言語に即しての一般言語学の可能性が明らかである。

私どもは、特殊に徹すれば徹するほど、一方で、かえってよく、一般性をうち出すことができる。私は、日本語および日本語学の特殊に徹することにつとめて、日本語の今日の歴史的現実――国語現実、方言を、研究の対象とする。方言という現代生活事実ほどはっきりした国語特定事実はない。これによって、もっとも鋭角的な言語学を実現することができれば、その特定言語学が、もっとも鋭角的な一般言語学になりうるであろう。

二　私がさきに外国の学界に多少ともふれて、言語研究につき考えさせられたことの、もっとも重要な点は、言語研究での humanistic point of view の欠如ということであった。第二回方言学者会議での多くの経験についても、そのことが言える。この学会でにかぎらず、一般の言語地理学的方言研究に、多く、単純な技術主義的傾向が認められた。方言は唯物的に、小きざみに処理されがちである。それがたとえ器用なしごと、巧みな操作であっても、そこには、方言の生命も言語の生命もないと思われるのである。このようなのが方言研究のすべてであってはならない。しかし、西洋の方言研究では、一律に、伝統的な言語地理学的方法がつよい。

方言研究にはかぎらない。欧米の多くの言語研究が、今日、どのようにか、機械主義的ないきかたの弊を持っていると思う。アメリカのいわゆる構造言語学にしても、その構造の概念からして、私にはすでに受けとりにくいものなのである。機械飜訳を問題とするような、真の機械的言語学は、それ独自の目的を持つけれども、それをもおおって、一般には、言語研究に、「人間」がいなくてはならないと思う。言語はつねに人間の言語のはずであり、人間の生の事実と見られるべきものだからである。

私は、言語学がどのように発展せしめられ、どのように尖鋭化せ

しめられようとも、その研究態度の中心部位には、つねに、humanistic point of viewがなくてはならないと思う。人間の学としての言語学は、どこまでも重んじられなくてはなるまい。

三　上述の考慮からして当然に導かれることは、言語対象把握のための分析が、もっとも良心的であるべきことである。生きたものをとらえるのであるから、分析は、しかるべき単位に着目した、言語の生命体をこわすことのないものでなくてはならない。研究の宿命作業、分析を、適度のものとすることがまず要請される。

分析は、微視の方向への分析と、巨視の方向への分析とに分けて考えることができよう。言語の、雲塊にも等しい全存在に対しては、sentenceやsentenceの連続体をとらえていくことも分析であって、これは巨視的分析である。この方向では、分析過剰はおこり得ないであろう。危険なのは、微視的分析の方向である。この方向に進んで、人はしばしば、分析のための分析をする。

ひとくちに言って、西洋の言語学は、微視的分析の言語学ではないか。それは、言語の研究に多くの貢献をし、法則の発見にあずかることも多くて、言語学をまさに言語科学の名にふさわしいものとしたけれども、じっさいに、分析の道を機械的・技術的に走ることにもなったようである。結果として、言語の実体を見うしなった言語分析を見せることにもなったのである。実体を見うしなった言語分析、これは人間不在の、血の通わない言語研究である。

機械的分析の過度は、humanistic point of viewの欠如と相即するものであろう。後者がなければ、分析は節度を失って前者におもむくのが当然であろう。

私どもは、研究者として、対象自体の発する分析要求の声に敏感にならなくてはならない。分析の途中にあっても、分析の手をやすめて、生きた言語対象の分析要求の声を聞くべきである。そうすることが、humanistic point of viewに立つことである。

正しい分析によって、生命のこもったunitがとらえられる。大であれ、小であれ、生命のこもったunitがとらえられるならば、分析は成功である。そのような分析は、容易に、私どもに分析結果の総合をゆるすであろう。ここで、私どもは、よく、生きた言語なるものを科学的に把握することができる。

表現前と表現以後

一　私の方法の根底となっているものは、表現前と表現以後という考えかたである。

言語表現とは何か。言語活動における、形式と内容との有機的統一体である。私どもの現実の言語生活は、この言語表現によっておこなわれる。この世に生きてはたらくことばは、言語表現と言われるものにほかならない。

ところで、言語表現にかぎらず、表現は、すべて、一回性のものである。表現活動における外化は、すべて、一回かぎりのものである。

そのように、個別々々のものでありつつも、言語表現が、世のcommunicationの具（方法）となりうるのはなぜか。言語表現――表現が、表現法を持っているからである。表現の法はすなわち表現の社会性である。――社会的慣習である。個々の言語表現は、内に、社会共用の具としての約束・ルール・法則を持っているがゆえに、それが人に通じるのである。

そのルールは、あくまで、表現に内在するものである。目にすぐに見えるものではない。表現に内在し、かつ、表現活動の発始以前に、すでに可能態として存在するものである。それゆえ私どもは、このルールを、「表現前」のものと言うことができる。

表現前のルールをふまえて、人は、個別的個性的な表現をする。そのいとなみが表現活動である。かさねて言えば、人は、表現のための根拠、すなわち表現のしかた〈固定的なものと考えるべきではない〉を利用して、思想感情の表出をはかる。そこに表現がおこる。表現の外化が「表現以後」と見られる。

表現前では、私どもには、表現の法をふまえたいろいろの表現・外化が可能であろう。その可能性の中から、どれかの可能態を選別して、それを現実化する（表現する）。こうして表現の現実態がうまれる。

二　「表現前と表現以後」は、「可能態と現実態」と考えることもできる。またこれを、「語の次元と文の次元」あるいは「音韻と音声」とも考えることができる。文は、言語表現の現実である。文は文表現であって、言語表現のもっとも明確な単位である。この文（文表現）に、表現の現実を代表させることにすれば、私どもは、現実態という術語と文という術語とをおきかえることができる。語は、文表現前のものである。私どもは、語を語として発言できるか。否である。発言したら、もはや、その語は文の表現になる。語はまったく、文以前、個人の登言活動以前のものである。――個人によって発言されることを期待しつつ、文表現の下位に隠在するものである。すなわち、語はまさに、人間の表現生活のもとで、可能態として存在するのである。

私は右のように、語と文との存立次元を区別する。「表現前と表現以後」とは、まったく、次元観にもとづく対象整理だったのである。語は表現前のものであって下位次元に位し、文は表現以後のものであって上位次元に位する。

こう見る対象整理が、人間の学としての言語の学に有効であることは、多言を要しないであろう。

三　前説からして、ソスュールのラング・パロールの説を想起する。

私見によれば、ソスュールのラングは、表現前のものであり、パロールは、表現以後のものである。パロールは文表現の次元に位し、ラングは語の次元に位する。――文表現はパロールに属し、語はラングに属す。（一語文などと言われる文表現は、すでにパロールである。）

ここで私は、おことわりしなくてはならない。私には、ソスュールのいわゆる『一般言語学講義』の背後にソスュールの真意を深く読みとる作業など、何もできない。それゆえ、ソスュールの真意は知らないのである。しかし、ソスュールがラングとパロールとを分別していることには、一つの思想的な啓示を感知しうる。私は私なりに、ソスュールのこの啓示を、じつに有益なものと思うのである。

そのような理解のもとで、私は、私の「ラングとパロール」の考えを表明したい。私としては、以下の考えが、私なりのソスュール解釈というつもりである。

私どもの言語生活では、言語表現として発現するものは、すべてパロールである。現実界には、パロール以外の何ものもない。したがって、私どもは、研究上、ラングをすぐに単純にラングとして研

究することはできない。人は時どき、ラングの研究とパロールの研究とを単純に両立させて、ラング・パロールの説明をしているけれども、それは、ラングを正しい位置において見たものではない。ラングとパロールとは表裏一体の関係にある。両者は対立概念をなすものではあっても、事実上、一如一体と認められるものである。

言語表現の実用において、意味が通じるのは、その言語表現に、社会的因子、人の心と心とをむすびあわす（人の心と心とを通わせる）社会的な約束――法則があるからである。パロールという言語表現の現実は、ただのパロールだけでは存立し得ない。パロールがそこにあるということは、すなわちそれがラングに支えられているということなのである。それゆえ、パロールの学ということも、ラングの学を予定しないでは（――内包しないでは）、言い得ないことである。

人が、「ラングの言語学、パロールの言語学」と言ったとすれば、それは、ものの二面・二傾向として理解すべきである。ラングの言語学の上にパロールの言語学が築かれると考えるのなどは、ラング・パロールの対立概念を、ただに機械的に受けとったことを示すものにすぎない。

世にはまた、「ラングの文、パロールの文」などという見かたもある。「これは私のです。」のような主述の整ったものをラングの文とし、「ぼくのだよ。」などというようなものをパロールの文とする。たいへんな誤解である。「ぼくのだよ。」にしても、かならず、内にラングがある。ラングがなければ、これが人に通じることばにはならない。通じることが、ラング存立の証明なのである。（「ぼくのだよ。」が、一定の法則で――語序で――つづられているのを見られよ。その語序という法則の具現・外化がパロールの「ぼくのだよ。」である。法則はすなわちラングである。）「これは私のです。」にしても、この具体的表現は、もちろん、パロールである、個人によって、なんらかの目的で、何かが、だれかに向かって、どこかでどのようにか発言されたうえは、その発現は、すべてパロールである。（内にラングを含む。構造・くみ立てを含む。法則を含む。）文の表現は個別的であり、その現実ごとに、それらはみな、パロールでしかない。

人はこんなことも考えた。書いたことばに比較すれば、話したことばは、よりパロール的であると。これもあやまった思考である。話されようと書かれようと、ことばが個人によって個性的に発言され発現せしめられた以上は、そのものは、みな、パロールである。他の人がすぐに模倣追随して書くことができるような文・文章を、一個人が書いたとしても、その書かれたものは、純乎とした個人表現であって、けっしてラングというものではない。同一センテンスが二人によってそれぞれに作られた場合にも、まったく、それぞれが、書き手おのおののパロールである。

同一人が、同一センテンスを、話して、また書いたとするか。そのさい、話されたものの方が、より尖鋭で、より尖端的であるかのように考えることも、なくはない。（――そこで、話された方を、これこそパロールの名にふさわしいもの、と思ったりする。）しかし、それもまた単純な誤解である。音声化されたものの方が、より尖端的かのようであっても、じつは、その音声化にもまた法則がある。法則――ラング――がなければ、その音声的表出は、ことばとして通用しないはずである。音声的表現にも、ことばの内的秩序が

あって、そのいっさいが、ラングなのである。さて書かれたセンテンスに対しても、私どもは、また、その現われた直接の結果を、第一に、パロールと見なくてはならない。要するに、話されたものも書かれたものも、個人の手からはなれおちたそのものは、みなパロールなのである。パロールを音声言語と規定したりしてはならない。

人は時に、ラングは語においてみとめられるだけのもの、文ではみとめられない、と説く。一見、もっとものようである。が、これもまた不徹底な説明である。なるほど、語は、ラングとしてしか認められない。（パロールとして認められる時は、その語はすでに文になっている。）けれども、ラングのみとめられるのは語においてだけだとは言えない。すでに述べたように、文においても、ラングは認められる。私どもは、躊躇することなく、文の表現にラングを認めていくべきである。文には文のラングがある。（ラングがなければ、文は人に通じる文とはなり得ない。）ラングを背後的基礎的なものと考えるあまりに、ラングを、ある限られたもの、長くはないものと考えたりするのなどはあやまっている。ラングについて、その大小を考えることなどは無用である。

ラングは仮定的なものか。そうではなくて、内在的なもの、実体的なものである。ただ、実体的とは言っても、パロールをはなれて実在するというようなものではない。皮膚を支えてその直下に存する筋肉のように、ラングはパロールを支えてその直下に不離者として存在する。ラングは、可視物ではないけれども、理論上、存在すると考えられるもの、考えざるを得ないものである。それこそ、志向的客体である。

ラングは観念形態とも見なすことができる。しかし、くりかえして言う。この観念形態は、ひとり遊離しないものである。ラングはつねにパロールを予想する。

（したがって、一方の学問は他方の学問を予定する。両者は分立の学ではなくして双成・相互助成の学である。）

在るものは一つであって、その受けとりかたに、次元別による両様の受けとりかたがある。一方の上位次元ではパロールが受けとられ、他方の下位次元ではラングの定在が認知される。

四　ソスュール思想での金字塔は、言（パロール）の思想であろう。ソスュール学最大の独創は、ランガージュからの言（パロール）の析出にある。パロールの析出と提言とには、絶対の妙味がある。

彼によって開示されたこの「パロール」について、私どもは、どのようにも自由に考察を進めてよかろう。ソスュールは、パロールの思想の伸展を、すでに私どもに求めているかのようである。

私は、ソスュールの思想に依拠して、言語表現の個人性・個別性・現場性を強調する。言語生活に関して、「表現以後」の考えかたの重要であることを強調する。

考えてみると、私は、私の方言研究から出発してソスュールにむかった。私の方言観・方言研究観の養成とともに整頓し得たのが、「表現前と表現以後」の考えである。

人間の学としての言語学のためには、また、言語研究にあって humanistic point of view を重んじようとすれば、いきおい、私どもは、「表現以後」そのものの観察と把握と処理とを重んじなくてはならないことになると思う。

言語構造の分析

一　日本語にかぎらず、どの言語の場合にも、一言語は、まず、その言語に生きる人びとの言語生活の総体――一大統体――として受けとられる。この、言語生活の一大統体は、すなわち表現以後の世界にほかならない。

表現以後のその世界を構造体として理解しようとするのは、表現以後の世界を、「表現前」に即して合理的に把握しようとするものである。

一言語を構造体と見て、これを分析する時、第一に、音韻的構造が認められる。第二に語彙的構造が認められる。第三に文法的構造が認められる。

一の一　表現以後の言語生活は、だれにとっても、まず音声の生活である。（――それが文字に定着されれば、書きことばの生活、表記の生活になる。）言語の現象面として、音声面がまずとらえられる。その音声面を把握する方法が、音韻論的方法である。パロールの音声の観察にあたって、ラング観としての音韻論が適用される。こうして、言語構造の一部としての音韻的構造が記述される。

一の二　表現以後の言語生活は、局面をかえて見れば、だれにとっても、個々の単語をつかう生活である。ここで、個々の単語のむらがる語彙が問題になる。

語彙の世界は、ラングすなわち表現前の大きい世界にほかならない。が、この世界から資材を得て、人はみな表現以後の言語生活をする。一言語を語彙的構造としてとらえることも、また、言語構造の重要なとらえかたになる。

一の三　個々の音や個々の語を、つらねて一連の有機体たらしめるものは文法である。文法は、そういう支配力を持つ。個々の語のある一語を文にするのも、文法のはたらきである。

このように、文法は内在的なものである。ラングと言うべきものにちがいない。言語は、内在の構造、文法構造を持つ。

もとより、どんな内在的なものも、それをとらえるのには、外在の形象（――パロール）によらなくてはならない。個々の現象形態を通じてしか、文法はとらえようがない。

一の四　話されることばが、文字や符号によって定着される。その定着の過程を対象にすれば、ここに、いま一つの、言語構造の分析ができることになる。すなわちここに、表記法構造とも言うべきものがとりあげられる。

以上、言語構造を分析して、私どもは、四とおりの構造を区別することができた。そのいずれもが、「一つの言語に属する成員すべてが形成する一大言語生活」を科学的に把握するための方法のよりどころとなるものである。

二　一つの言語をとらえる方法として、私どもは、以上の考えかたとはちがった分析手段を見いだすことができる。それは、つぎのような見かた考えかたによるものである。

言語 ┬ 意味の世界
　　└ 抑揚の世界、表記の世界

言語には、その表現以後の世界を注視するのに、まったく、意味の世界と見ることができる。じっさいに、言語が言語として用をなすのは、人間のあいだに意味を通わせるからである。意味の通わぬところに言語はない。言語は、要するに意味であると言うことができる。

意味を直接にはこぶものは何か。音声の抑揚であり（話しことばでは）、表記の記号――文字や符号――である（書きことばでは）。言語は、じつさいに、中味の意味と外形の抑揚または表記とで成り立っているとすることができる。このような見かた考えかたをとって、私は、言語構造分析の第二の方法を立てる。

二の一　言語にとって、意味はつねに意味作用である。意味が意味として通用するのは、意味が、発言者がわから受容者がわに、作用するのである。――（作用が意味の流通をきたし、時に不流通をきたす。）

作用としての意味、つまり意味作用が、言語音声を支配し、「語の利用」を支配し、文法を支配する。言語は意味作用がすべてであると言える。

言語学は、意味作用の法則の科学だとも言える。

二の二　言語を外形的に見た場合は、書きことばでは、表記面がすべてだと言える。話しことばでは、音声上の抑揚がすべてだと言える。

書きことばで、表記がすべてであることは、すでに明らかであろう。書かれたことばは、文字や符号で定着されていて、表記によってのみ、まさに可視的である。表記がすべてである。もっとも末端的なもの、外形化の局限――表記面が、言語のすべてなのである。

話しことばでは、どうして、音声上の抑揚が言語のすべてだと言えるのか。話される（―た）ことばは、音声化される（―た）表現である。このさいは、音声面が、言語表現の末端になる。ところで意味作用の担い手たる音声表現、意味作用によって統率される音声形態は、しぜん、「文」表現音声という形式をとる。文表現音声という音声相の、最後的な頂面、局限面は、じつに抑揚であると考えられる。それゆえ、話しことばでは、けっきょく、抑揚が言語のすべてであると見ることができるのである。

二の三　抑揚と表記とは、同格の地位に立つ。これらはともに、言語のパロール面と考えることができる。パロールの抑揚面に即しては、抑揚の型、社会的習慣をとらえることができる。このものはすなわち、表現前のラングと考えることができる。表記に即しても、私どもは、表記法という法をとらえることができる。これがまた、表現前のもの、ラングにほかならない。もとより意味作用に関しても、その現実のパロール（意味作用は表現以後のものである）に対して、表現前の意義を認めることができる。意義はラングにほかならない。

抑揚と表記が、意味を直接にはこぶこと、抑揚・表記と意味作用との合体については、もはや多くを言わない。

二の四　言語の学問は、以上のようにして、意味論と抑揚論（表記論）とより成るべきことが理解される。

意味論は、文法論と音声音韻論と語彙論とをおおう。抑揚論もまた、話しことばの文法論・音声音韻論・語彙論をおおう。表記論も書きことばの文法論・音韻論・語彙論に深くかかわる。

意味論と抑揚論（あるいは表記論）とは、表裏一体の関係をとる。

旧来の、音韻・文法・語彙・文字などの言語研究部門別は、今の新しい考えかたによって、超部門的に統合されよう。

二の五　言語研究に関する右のような範疇論が、言語の学の新しい方法になりうると、私は考えるのである。

（45、12、24）

――広島大学教授――